동아시아학
东亚学科
OF EAST ASIA

熊本学園大学外国語学部東アジア学科

News Letter

第 37 号

2024 年８月１日発行
バックナンバー

■ 巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授
東アジア学科　小笠原　淳

我々の東アジア学科の学生たちは、八月に入ると三週間の海外研修に出発します。今年の研修先は、韓国は聖公会大学、中国語圏は台湾師範大学です。研修先では、午前中はコミュニケーションを中心とした少人数制の対面授業が行われます。午後は街に出て観光や買い物をするなどの実践を通して、自らの語学力に磨きをかけます。

授業の他にも名所旧跡を探訪したり、文化を体験したりするプログラムも組まれています。この海外研修は、本学での事前授業と現地研修からなっている独自のもので、日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度に採択され、費用面でも学生たちを最大限サポートする体制を整えています。長期の交換留学では、これまでに 150 人を超える交換留学生を東アジア学科から送り出してきました。

この他にも、インバウンドと海外企業の進出によって加速している地域のグローバル化に対応すべく、学科内に「中国語翻訳・通訳プログラム」を新設しています。また、「韓国語文法」の授業も新設し、言語能力の可視化に取り組んでいます。さらには、台湾・台中にある東海大学との学部間協定に基づいて、台湾と本学の学生間の国際交流もスタートさせました。

東アジア学科は現在、座学による知識の涵養のみならず、学外へ向かって新たな学習領域を切り拓くことで、たえず進化を遂げています。

□■学科の最新ニュース！
東アジア学科の授業風景やニュースなどを学科ホームページで配信しています。QR コードよりご覧ください。

□ 研究紹介――昔の韓国語の研究

東アジア学科講師　髙橋　春人（韓国語学）

初めまして。この度着任いたしました髙橋と申します。専門は韓国語史です。韓国語の歴史、昔の韓国語はどのようなものだったのか、どのように変化してきたのか、といったことを研究しています。これからよろしくお願い申し上げます。

韓国語の歴史は、訓民正音（ハングル）が創制された 15 世紀半ば以前を「古代」、訓民正音創制から 16 世紀末までを「中期」、その後 17 世紀から 19 世紀を「近世」と大まかに区切ることができます。この中で、大学院在学中は主に「中期」と「近世」の過去時制の研究をしました。

例えば、今の韓国語の過去形は、「～して」のような語尾と「いる・ある」を表す語を組み合わせた形に由来しています。日本語の「て」＋「あり」が「たり」になり、さらに「た」になったのと似たような変化です。これとは別に、昔の韓国語には「～していた」のような意味を表す語尾があったのですが、それが現在の韓国語では少し変わって、自分で目撃したり感じたりした、という意味も持つようになっています。大学院では、これらの変化の過程においてどのような現象が観察されるか、といった点を研究していました。

このような研究を行うには、ハングルで書かれた昔の文献を利用します。しかし、ハングルさえ読めれば十分な理解が得られるか、というと、そうでもないところが難しくもあり、面白くもあると感じています。

まず、言語の歴史を研究するという点では、日本語も含め、韓国語以外の他の言語の歴史はどうだろうかと比べる必要があります。次に、朝鮮半島は印刷術も有名ですが、活字本や木版本といった昔の文献を利用するには、書誌学や文献学の知識が求められます。手書きの資料を利用するには、崩して書かれているハングルも読めなければなりません。さらに、書かれている内容を理解するためには、時代背景、当時の人々の生活、考え方、常識などを知っておかなければなりません。そのため、中国・朝鮮・日本に関する歴史学、文学、民俗学などとも深い関係があります。漢字文化圏である朝鮮半島のことを理解するために、もっと漢文がしっかり読めるようにならなくては、とも感じています。ハングル創制以前から使用されていた吏読や口訣と呼ばれる表記法で書かれた資料も扱えるようでなくてはなりません。

このように、まだまだ勉強しなければならないことばかりなのですが、幸いにも本学部は各分野の専門家がそろっていますので、これから様々なことを学びながら、韓国語史の研究に取り組んでいきたいと考えています。

■ 「出張日記」日常の歴史と共存するＫ文化

東アジア学科教授　申　明直（韓国文学・文化）

毎年７月末から８月初めになると、学生たちを引率して韓国に語学研修に行く。ところが、学生たちは最近、明洞や仁寺洞をあまり訪れていない。依然として弘大側のインディアート文化を楽しむ学生もいるが、学生たちが必ず行ってみたがるところは聖水洞と益善洞だ。聖水洞は本来、ソウルの東側に形成された中小工業団地があったところだ。

彼らはなぜ、このように狭い路地やみすぼらしい所をわざわざ訪れるのだろうか。聖水洞の「オニオン」というカフェは 1970 年代に作られ、スーパー、食堂、家庭、整備所、工場につながる歴史を持っているという。カフェが強調しているのは、床に付いているペイントの跡一つ一つが持つ歴史性だ。「解放村」の「ル･モンブラン」というカフェは、そこが以前に紡織工場だったことを知らせる多様なセーターケーキを出して有名になったところだ。結局、韓国を訪れる探訪客は、韓国の歴史が剥製化された博物館のような場所ではなく、古びた韓屋路地、古びた昔の工場跡のような「日常」を求めているようだ。「カフェ探訪」形式を借りて、実は「日常」の中の韓国の歴史、庶民の中の韓国の歴史を理解し消費しているのである。

もちろん、そこには過去のみすぼらしい思い出だけが存在するわけではない。 最先端のアイテムと最高のデザイン、皆の味覚を虜にするような味と趣が一緒に存在する。カフェ「オニオン」が提供するパンは聖水洞最高のグルメ店にふさわしい味を披露しており、その付近にはＫポップの本山であるＳＭエンターテインメント本社が位置している。古びた乙支路（最近はヒップなところだからと言って、ヒップジローとも呼ばれる）にあるカフェは空港コンセプトとボーイング飛行機の室内装飾をそのまま移して有名になったが、そのカフェ付近には BTS の聖地ウルチ喫茶店がある。

観光客は韓国最先端のファッションをリードする汝矣島「ザ･ヒュンダイ」デパートを訪れるほか、最もみすぼらしい東大門市場付近の「東廟」や「広蔵市場」を訪れることもある。すなわち彼らの行動からは、Ｋポップとドラマの「華やかさ」、その華やかさの裏にある庶民の歴史がそのまま崩れている「虚しさ」を同時に楽しもうとする態度を垣間見ることができる。

□ 東アジアへのまなざし

東アジア学科教授　李珊（中国語学）

最近、中国語圏から来た留学生と接していて感じることがある。かつて私たちが留学をしていた時代、日本に来たばかりの頃、もし日本語が通じなければ、生活でも学習においても全く立ち行かなかった。だから、何をさておいても、まずは言葉という大きな壁を乗り越えていく必要があったのだ。しかし、いま日本にやってくる留学生は、生活や学習の過程で生じた言葉の壁を、スマホを使って解決することがしばしばだ。したがって、彼らは言葉の壁という概念に乏しい。その上、毎日リアルタイムで自国のニュースを得ることができ、日本にいながらも依然として中国語圏で暮らすような感覚をもつことが可能だ。

また、留学後、２、３年が経過した留学生と接してみて感じるのは、彼らの日本語のレベルがそれほど大きく進歩していない場合があるということだ。その原因はおそらく、留学生たちがＡＩに依存しすぎているからだと考えられる。確かに、ＡＩは目の前で起きた問題を一時的に解決してくれる。しかし、同時にそれが学習プロセスにおける大きな落とし穴にもなっているのである。語学の学びとは、自分の力で問題を解決しようとしてこそ、真の意味で自身の実力が高められる。それを怠っていては、活きた言葉の力を身につけることは難しいだろう。

時代がどのように進歩しようとも、言葉とは直接話してこそ自分のものになっていくのだ。

■大谷亨『中国の死神』青弓社、2023 年

東アジア学科准教授　黒島　規史（韓国語文法）

かの魯迅も随筆を残している「無常」という存在について、著者のフィールドワークをもとに書かれているのが本書だ。「無常」とは一言で言ってしまえば中国の死神であり、正確には寿命が尽きようとしている者の魂を引き出す使者である。このような存在でありながら、中国では各地で廟に祀られており、どのような経緯でこの「死神」が誕生し、そして祀られるようになったのか、その謎が徐々に明らかにされていく。本書は著者の博士論文がもとになっているが、まったくおカタい内容ではなく、随所に写真やイラストが挿入され、門外漢でも十分に楽しめる。

本書の「はじめに」にも書いてあるように、著者がこの「無常」を博士論文のテーマに選んだ理由は、なんと「ビビビッ」ときたからであるという。この本を読むと、研究者が自分のワクワクに従って研究をしている様子も窺い知ることができ、一冊で二度おいしい。

発行者　熊本学園大学外国語学部東アジア学科
編集人　小笠原　淳（東アジア学科長）〒860 - 8680　熊本市中央区大江２−５−１　Tel 096-364-5161（代）